筒井康隆『七瀬ふたたび』論
――死と希望――

西貝　怜

はじめに

本稿は、筒井康隆『七瀬ふたたび』で描かれる火田七瀬の死の意味について、「精神感応能力者」の在り方の変化という視点から考えたものである。

『国文学　解釈と鑑賞』第七六巻第九号（二〇一一年九月号）（1）の特集名は「筒井康隆――現代文学の巨人」であった。多様な論考が収められたこの雑誌の中でも平石滋（2）は、「筒井康隆研究は本号をもってだいぶ進む」と述べつつ、「まだ充分ではない」「これからの研究が新たな分野を拓く」とも書いている（3）。

この『国文学――解釈と鑑賞』第七六巻第九号にも論考（4）を載せた藤田直哉は、後の二〇一三年に「本書は筒井康隆の著したテクストから「虚構内存在の思想」を取り出し、世に問う」と目的を記した『虚構内存在――筒井康隆と〈新しい《生》の次元〉』（5）を刊行した。そしてこの藤田の研究を踏まえ杉田俊介は、「超虚構理論」という視点を折り込みながら筒井における文学と差別の問題を論じた（6）。このように筒井研究は、『国文学――解釈と鑑賞』第七六巻第九号を踏まえて進んだ領域はあるが、特に個別の作品を詳細に検討した研究は、いまだにあまり進んでいない状況である（7）。そこで本稿では七瀬シリーズを取り上げる。

七瀬シリーズは『家族八景』『七瀬ふたたび』『エディプスの恋人』の三部作からなる。それぞれ雑誌連載を経て、第一作の『家族八景』は一九七二年（8）、第二作の『七瀬ふたたび』は一九七五年（9）、第三作の『エディプスの恋人』は一九七七年（10）に単行本化されている。どの作品も、七瀬という「精神感応能力者」が物語の中心人物である（11）。

一九八四年に内藤誠は、それまでの七瀬シリーズの考察で重要なものについて「すでに「七瀬三部作」についても平岡正明は、筒井康隆が「家族・国家・神」というテーマを立てたのだと論じきり、柘植光彦は、いやそうではなくて自分の中につくり出されたアニマが恐るべき姿へ成長していくことへの、作家自身の畏怖の物語であると記した」とまとめている（12）。その後、二〇一七年に佐々木敦は、筒井の作品史を詳細に整理した『筒井康隆入門』を著した。この中の「第二章　黒い笑いの時代　『家族八景』（1972年）から『大

いなる助走』（1979年）へ」（13）で佐々木は、以下のように述べている。

「七瀬三部作」は筒井康隆という作家を語るうえで絶対に欠かせない重要作品のひとつです。七瀬というヒロインの成長譚としての魅力ももちろんありますが、何よりも重要なことは、この三作がすべて異なるスタイルで書かれたことです。連続するシリーズでありながら、ここまで極端に小説としての在り方自体が変わっていった例は他の作家にもありません。

ここでいうスタイルとは、小説ジャンルのことを指している。『家族八景』は「SF的アイデアを使ってSFとは別の小説を書」いたもの、『七瀬ふたたび』は「サイキックアクションSF」、『エディプスの恋人』は「ユーウェーブ小説」と述べられている。このように小説ジャンルが変化していく七瀬シリーズは、作品ごとに詳細な検討が必要である。しかし、改めて現代において筒井作品を考えるのに「重要」といわれる七瀬シリーズの作品ごとの検討もまた、一九八四年以降、あまり進んでいるとはいえない。

また、佐々木は七瀬シリーズを「七瀬のヒロインとしての成長譚」と述べている。たしかに『家族八景』は、七瀬がいくつかの家庭を家政婦として渡り歩き様々な経験をして、それを辞める決意をするまでの話。『エディプスの恋人』は『七瀬ふたたび』で殺された七瀬が神により蘇生され、自身がこの世で生きていく覚悟を決める物語ではある。詳細な検討は必要だがこの二つの作品は、七瀬自身に価値のある決意をするまでの「成長譚」として読めるかもしれない。しかし、『七瀬ふたたび』はどうだろうか。

七瀬は、「超能力者」として様々な困難に立ち向かった後に、最終的には殺されてしまう。ラストに死が描かれていても、それまでの過程が「成長譚」であることは物語の類型として十分あり得る。しかし七瀬は、「良心」「本能と使命感」などといいつつ「普通人」や「超能力者」を見殺しにしたり積極的に殺したりしていくし、「正義」に目覚めるも「復讐」を誓う（詳細は後述）。この点で『七瀬ふたたび』は、そこに七瀬の意識や思想の変化があろうが、またたとえシリーズ中に七瀬が身体的な成長を遂げていっていようが、およそ「成長譚」とはいえそうにない。

ただ、この七瀬の変化に注目しなければ、その結果である今際の際で「超能力者」が「迫害」されないことを七瀬が「祈る」場面が理解できないだろう。そして、その七瀬の死の意味を考えなくては、次作の『エディプスの恋人』でなぜ七瀬が神のような存在によって蘇生されたのか、そしてその後にいかに生きようとしていたのか、

といったことが理解できないだろう。すなわち、七瀬の死の意味を七瀬の変化から考えることは、『七瀬ふたたび』という作品単体の理解を深めることだけではなく、七瀬シリーズ全体を考えることにも寄与できることから、今後の筒井研究を進めるために重要である。

そこで本稿の目的は、七瀬の変化に注目して、七瀬の死にどういった意味があるのかを明らかにすることに設定した。その目的遂行のために、本稿では以下の手続きをとる。

まずは、七瀬の「精神感応能力」がどういったものかを確認する。それを踏まえて、「普通人」の社会にとって「精神感応能力者」である七瀬がどういった存在なのかを考える。その上で七瀬は、殺されるまでに如何にその「普通人」の中で「精神感応能力者」として生きてきたか、その変遷を追う。そして最後に、七瀬が今際の際で「超能力者」と「普通人」の親和的な関係を「意識」することを、七瀬の生き様の変遷とともに検討することで、本稿の目的が達成されるだろう。

「精神感応能力」が読みとる「意識」

七瀬の「精神感応能力」は人の「意識を読みとる」。この「意識を読みとる」という設定は、前作の『家族八景』を引き継いでいる。その『家族八景』について筒井は、インタビュー記事「非SF的インタビュー／筒井康隆かく語りき――地獄までは遠いし、壊すものはまだたくさんある」（14）の中で、担当編集者と相談してテレビドラマ『コメットさん』をモデル（15）に書こうと決めたと述べた上で、以下のように語っている。

> あれは宇宙人の化けたお手伝いさんだったかな。超能力で何でもできてしまう。あれでは万能だから面白くない、もっと現実的なエスパーものにしたら、もっとどろどろしたものが出てくるのではないか、と。
>
> 実際に書きはじめたら、やっぱりドタバタにならんですわね、精神感応）というものは。どうしても人間の意識のどろどろしたものが出てくる。

『家族八景』の中の「無風地帯」では、七瀬と同じく「精神感応能力者」の疑いがある尾形咲子が登場するが、最後までこの登場人物が「精神感応能力者」なのかは分からない。こういった描写もあるが、『七瀬ふたたび』の「普通人」に該当する人々の家庭に七瀬が住み込みの家政婦として迎えられ、そこで七瀬は「精神感応能力」を用いてその家族が抱える問題と様々に関わる、というのが『家族

八景』のあらましである。そして、そこで読みとられる意識は「どろどろしたもの」だと、筒井は言うのである（16）。

この「どろどろしたもの」というのが正の意識ではなく負の意識のようなものを指していることは分かる。そして、『七瀬ふたたび』でも、以下で詳細に見ていくが、いわゆるこの「どろどろしたもの」ともいえるような負の意識を、七瀬は多くの「普通人」から読みとっていく。しかし、この「どろどろしたもの」や負の意識というような言葉ではまだあまり具体性がなく、考察の展開がしにくい。

そこでここでは、七瀬が読みとる「普通人」の「意識」を整理していく。

まるで『家族八景』において七瀬が「どろどろしたもの」を読みとることの設定を確認するかのように、『七瀬ふたたび』の最初の章である「瀰逗」では、多数の「普通人」が持つ負の意識のようなものを七瀬に読みとられていく。七瀬は、汽車の中で自身の近くの席に座る狼青年から「(便所に行きやがらねえかな。そうしたらあとを追いかけていって、無理やり便所でやっちまうんだが)」という「意識」を読みとる。また、同じく七瀬の近くに座る中年女からは、その継子であるノリオが泣きはじめたことについての「(くそ。家へ帰ったら、また殴りつけてやるから)」という「意識」を読みとる。

以上の狼青年と中年女の「意識」を七瀬が読みとった上で、語り手は「心を読んでみると、ほとんどの人間が常に何かしら策謀している。女たちの策謀はたいてい誰かに意地悪するためだが、男の策謀の対象は主として仕事上のライバルと女性だった」と述べる。

実際に狼青年以外にも七瀬は、隣に座る狸紳士の「(まず、口を手でふさぐんだ。それから耳もとで、でかい声を出すな。方輪になりたくなかったら、おとなしくしろ)」や、ほかにも「ヘニーデ姫」においてイタリアン・レストランで実業家から「(酒を飲ませる)(酔わせて)(もう一、二軒まわって)(ホテルの部屋へ)」など、男性の性的な「策謀」を読みとる。また、「邪悪の視線」では、ダイヤの盗難事件が起き、そこでは中年女と同様に女性の「意地悪」ともいえるような「策謀」が描かれる。自身のダイヤを盗んだのは弥栄にも関わらずしげみは、その犯人を七瀬だと決めつけ「(なんて言ってやろうか)(ダイヤ泥棒)(遠まわしにいたぶってやるわ)(あてこすりを言ってやるわ)」と「策謀」する「意識」などが、その一例として挙げられる。

以上のように、男性の女性を犯そうとするような、あるいは女性の「意地悪」をしようとするような「策謀」を、たしかに七瀬は多くの場面で読みとる。ただ、ほかの「策謀」も描かれる。たとえば「七瀬　時をのぼる」では、アベックの男が「(女の貯金を、ほとんど使ってしま)」い、それを知られる前に「(殺すしかない)(殺すと

したら）（この女が安心しているうちだ）」と「策謀」する「意識」を、七瀬は読みとる（17）。

こういった「策謀」以外にも目を向けると、中年女から「（なんだい、この不良娘は。つんつんしやがって。ちょっとばかり自分が美人だと思って）」、しげみから「（ふん。半鐘泥棒）」といった嫉妬のような「意識」を、七瀬は向けられる。また、「邪悪の視線」で七瀬は、同じく「ゼウス」内にいる人々の「意識的雑音」の一つとして「（こいつ、酔っぱらったふりを）（だまされないぞ）（タヌキめ）（くそ）（酔うもんか）「うわあ酔った」」といったものを読みとる。

以上の嫉妬や「意識的雑音」などと「策謀」とには共通点がある。それは、「普通人」の人間関係において、ある相手と敵対するような「意識」でということである。すなわち、七瀬が読みとる「普通人」の「意識」の多くは、言い換えるならば人間関係における〈敵意〉だといえよう（18）。そして、「普通人」の社会は、多くの場合〈敵意〉を隠しながら営まれている。〈敵意〉があるからといって、「普通人」はそれを表出させないことで闘争状態になることを極力抑えながら、一つの社会の秩序を築いているのである。では、この〈敵意〉を読みとる「精神感応能力者」としての七瀬は、「普通人」の社会にとってどういった存在なのだろうか。

「普通人」にとっての「精神感応能力」

「邂逅」で岩渕恒夫は、自身、七瀬、ノリオの三人だけが汽車の落石事故から逃れる様子を「予知能力」で知る。それを聞いて七瀬は、汽車が落石事故に遭うことを周知できないかと恒夫に問う。そして恒夫は、「（事前に予知したこと騒ぎ立てたりしたら）（笑いもの）（誰も信じない）（しかも、その予知が正しかったことは事後の証明される結果となり）（能力が皆に知られてしまう）（迫害）（見せ物）（人間扱いしてもらえなくなる）」と考える。その後、「もちろん、そんなことは七瀬にもよくわかっていた」とも書かれる。また、「邪悪の視線」で登場する「透視能力者」の西尾も、「むろん彼は、七瀬と同じ理由で自分の能力をひた隠しにしていた」とも書かれている。

すなわち、恒夫、七瀬、西尾はともに自身が「超能力者」だと「普通人」に知られると「迫害」されるというようなことを考えている。また、「七瀬　時をのぼる」でヘンリーは自身の「念動力」を用いてアベックの女が海に落とされる際に、それを持ち上げて助けようとする。このときの様子を刑事に見られたことを七瀬に聞いて「「おう。ノー。ノー」嘘だと言ってくれといわんばかりに、ヘンリーは悲鳴まじりの呻き声を漏らした」とも書かれている。さらに同じく「七瀬　時をのぼる」で藤子は、七瀬が「超能力者」かどうか分からな

い段階で自身が「時間旅行者」と言い当てられ「(それよりはとりあえず時間遡行した方が安全)」と考え、自身の能力が知られていないことにしようとする。「邂逅」ではノリオですら、七瀬が狼青年や狸紳士に犯されようとしていることを察知して「(どうしたら)(教えてあげられるか)(ここで言ったら)(またママに叱られる)(皆が笑う)(このお兄ちゃんが怒る)(このおじさんも怒る)」と考える。

このように、「超能力者」らはその能力を「普通人」に知られてはならないと基本的に考えている。七瀬が「精神感応能力」を用いて知った弥栄の腹の不調を尋ねたときや、西尾が「透視能力」を用いてしげみが自身のマンションの部屋にくることを弥栄に知らせたとき、弥栄は「普通人」が普通では知りえないことを知っている二人を不可解に思う。このように、「普通人」にとって「超能力」は異質なものだ。

「ヘニーデ姫」では、「超能力者を憎悪していて、皆殺しにしようとたくらんでいる組織」があることが語られる。その組織の「殺人者」らも「超能力者の殺戮という大使命」に従い行動している。その大義名分は、「超能力者を人類全体に対立するもの」と捉え、「超能力者が多数発生して集団となる前に、皆殺し」にするというものである。このように「超能力者」は、「普通人」の社会から「迫害」されるべき存在だと描かれている。

また、七瀬は藤子から、自身の「時間旅行能力」が人を不幸にすると聞かされる。「時間旅行」は、自身らがいる世界とは異なる多次元世界の一つに行くことであり、元の世界に残された親しい人々に「自分が去ったために苦しむ」ことを生むと、藤子は言う。それについて七瀬は以下のように述べる。

> 「あなたの考え方だと、時間旅行者は時空連続体を破壊するための存在、念動力者は物理的秩序を混乱させるための存在、予知能力者は神によって定められた神聖なる運命を嘲笑する存在で精神感応能力者は人間の尊厳を犯す存在だということになるわ。それこそ例の組織の連中が考えだすにふさわしい考え方じゃない」

繰り返しになるが、「超能力者」らは「普通人」にとって「迫害」の対象だ。しかし、七瀬がここで指摘するように、その能力によって「普通人」の社会から「迫害」される理由は異なるはずだ。

七瀬は自身が「精神感応能力者」であることを、西尾と八百屋の店番に告げる。また、恒夫は「意識」が読みとられる苦しみを述べる。これらを考えることで、「精神感応能力者」である七瀬が「普通人」にとってどういった存在なのか、理解できるだろう。

西尾は七瀬に自身が「透視能力者」だと知られてしまったことで「(この女を犯して)(麻薬患者にして)(おれの奴隷にしてやる)」と考える。七瀬はこれを読みとって西尾に伝え、自身が「精神感応能力者」だと気付かせる。しかし、「それは普通の人間なら、一瞬にして気が狂いそうになるほどの衝撃である筈」と書かれつつも「西尾の心はさほど乱れなかった」と書かれる。

実際に「七瀬　森を走る」で、自身の思考を七瀬によって言い当てられた「普通人」である八百屋の店番は、「貧血を起し、店から奥の間へのあがり框に尻をおろして頭をかかえこんだ」。なぜそこまで恐怖するのか。それは、「迷信深い」店番が七瀬を「(化けもの)」と考えるからだ。しかし、こういった反応は、八百屋の後に寄った乾物屋の店番がヘンリーの「念動力」を見た時に「迷信深い田舎」で育ったために「恐怖心」から「自我を崩壊させてたちまち泣き出した」ことと同様である。以上もまた「超能力」一般の「普通人」の反応でしかない。

ただ「ヘニーデ姫」で恒夫は、七瀬がヘニーデ姫とともにいれば殺されることがないことを「予知能力」で知ったと、電話口で七瀬に告げる。このとき、七瀬は「心を覗」かないから恒夫に会って欲しいと頼むが、拒否される。その理由を恒夫は、自分が「心に思った恥ずかしいこと」を下に「精神感応能力者」が「笑い蔑んだ」ような想像をしたことを告げて、「他人に心を覗かれて、しかも心を覗かれたことを知った人間の苦しみ」があり、「心を覗かないと約束したって、誰がそれを保証する」と恒夫は語る。

この「意識」を読みとられ、それに気付く「苦しみ」を受けないことが、「人間の尊厳」である。しかし、「意識」を読みとらないと「精神感応能力者」が言っても、それを保証するものはない、と恒夫によって語られる。恒夫は「超能力者」ではあるが、こと「意識」を読みとられることについては、西尾と同様に「普通人」と同じ性質しか持ち合わせていない。

前節で見てきたように「普通人」の社会は、多くの場合〈敵意〉を下に営まれている。そして〈敵意〉をはじめ行動や態度の裏にある「意識」を知られず、また周知されないということを守るのは、「人間の尊厳」であり社会のルールである。これに対して七瀬は、どのように振る舞っているのか。

例えば「マカオのカジノ」のルーレットで七瀬は、「精神感応能力」を用いて「ディーラーが考える色や数字」を読み、ギャンブルに勝つ。それを「殺人者」たちは見ており、七瀬を「精神感応能力者」と「認めた」。それゆえに七瀬は、「殺人者」らと戦わなくてはならなくなる。この例も含めこれまで見てきたように七瀬は、「普通人」らの隠された「意識」を読んだ上で行動することもある。それは、

「普通人」の社会のルールや「人間の尊厳」を脅かすことになる。それゆえに七瀬は、「精神感応能力者」として「普通人」の社会にとって排除される存在だといえる（19）。ただ、七瀬はそれでも、その「普通人」の社会の中で「精神感応能力者」として生きていく。

以上から『七瀬ふたたび』では、「普通人」の社会の中で「精神感応能力者」の七瀬が如何に生きていくのか、という問いが展開されているといえよう。そのために、その七瀬の生き様を追った上でその最終地点が死であることを考えなくてはならない、ということを改めて主張しておく。

七瀬の回帰

「邂逅」において七瀬は、自身の「超能力」が周知される「危険」を意識して、汽車が落石事故に合うことを乗客に伝えないことに、前節で見たような恒夫とのやり取りを経て一度は納得した。しかし「こんなことを言わない方がいいのだが、そう思いながらも七瀬は自分の良心を納得させるため、低い声で三人に言った。「白樫でおりた方が安全ですわよ」とも書かれている。ただ、文学青年には睨まれ、中年女や狸紳士からはバカにされるように聞く耳をもって貰えないので、「ではしかたがない」と考えそのまま立ち去る。より強く周知して皆を救うには、自身が「超能力者」であることに気付かれる危険があり、それを七瀬は回避した。ここで「良心」は人を救うこと、自己保身は人を救わないことになるので、この二つは同時に達成できない。そのために七瀬の「良心」は達成されなかったが、自己保身は達成された。

次に、「邪悪の視線」で七瀬は西尾を殺そうとする。西尾は、「透視能力」を用いてしげみのダイヤを盗んだ犯人が弥栄だと知り、脅迫する。そのような振る舞いをする西尾について七瀬は、「彼女は超能力者としての本能と使命感のようなものによって、より強く動かされていた。同じ超能力者として、あんな邪悪な存在を許しておけないわ、彼を見逃すことはわたしにとって危険だわ」と考える。そして七瀬は、ヘンリーに指示して「念動力」によって西尾を殺す。ここで「本能と使命感」は西尾を殺すこと、自己保身も西尾を殺すことになるので、この二つは同時に達成される。

一見、「邂逅」での汽車の乗客を見殺しにすることと、「邪悪の視線」での西尾を殺すことは異なる。ただ、前者は「普通人」の死を消極的に容認していることになる。そして後者は「超能力者」に積極的に死を与えていることになる。すなわち、「本能と使命感」との間に消極的、積極的の違いはあるが、七瀬の「良心」は自己保身を乗り越えない限り他者の命を奪うのだ。しかし、七瀬がこれを乗り

越えようとしたのが「七瀬　時をのぼる」だ。

「七瀬　時をのぼる」でノリオは、船内でカップルの男が「女の人」を殺そうとしている「策謀」を読み取る。そして「女の人」を助けたいと考えたノリオは、七瀬にそれを言って交わされるやり取りが以下である。

（わたしたちは自分たちのことだけでせいいっぱいの筈よ）（私たちは超能力を使った事実を「普通人」に悟られてはならないのよ）（「普通人」を助けるために、他人のために超能力をやたらに使っていたら、いつかは知られてしまうのよ）（できるだけ、よけいな事件に巻き込まれることは避けた方がいいの）

ノリオは、だが、納得しなかった。（じゃ、あの女の人が殺されるところを、ぼく、黙って見ていなくちゃいけないの）（そっと助けてあげられる方法がある筈だよ）（助けてあげたあと、精神感応を使って、いくらでも誤摩化せるじゃないか）（お姉ちゃんが助けてくれないなら、僕がやるよ）（二等船室に行って、皆に、女の人が殺されるから助けてあげてくれって頼むよ）

七瀬はぞっとした。ノリオにそんなことをさせてはならない。ノリオの純粋さが、自己保存の本能の下に埋もれていた七瀬の正義感を掘り起こした。（すぐ、そっちへ行くわ）

そして七瀬は、自身らが「普通人」に「超能力者」だと知られる「危険」を省みず、ヘンリーの「念動力」を用いて「女の人」を助けようとする。「良心」では自己保身が勝って列車の乗客を見殺しにしてしまったが、また、「本能と使命感」には他者の死も含まれていたが、七瀬はそれらを乗り越える倫理的態度、「正義感」に目覚めるのだ。

この後に「ヘニーデ姫」で七瀬は、自身が「精神感応能力者」だと「殺人者」に気付かれるが、それに気付いた者と殺害を実行する者とが異なることから、自身とヘニーデ姫のどちらが「精神感応能力者」なのか、殺害を実行しようとする「殺人者」には知られていないということに気付く。そのために七瀬は、恒夫の予知でも自身がヘニーデ姫とともにいる限り殺されないことを聞いたこともあり、状況の打破までヘニーデ姫と行動をともにしようとする。しかし、そのためにヘニーデ姫は誤って銃殺されてしまう。この時に七瀬は、以下のように怒る。

恒夫はヘニーデ姫の死を予知しながら、それを七瀬には黙っていたのである。そんな恒夫に腹が立ったし、それ以上に、わ

が身を守るためヘニーデ姫を危険にひきずりこんだ自分と、そんなことに今まで気づかなかった自分に、七瀬は腹を立てていた。殺してやるわ。あいつを殺してやるわ。復讐してやるわ。ヘニーデ姫のために。殺してやるわ。

ここで七瀬が恒夫に腹を立てることができたのは、ノリオによって「正義感」に目覚めたからである。「超能力者の殺戮という大使命」の前には「同胞」である「普通人」が犠牲になることも許されると考える殺人者らを「許せなかった」のも、同様である。犠牲としての他者の死を善しとしないのが、七瀬の「正義感」だからだ。しかし七瀬は、また自身を守るために他人を犠牲にしてしまったと、自身にも腹を立てたのである。そして、七瀬は「復讐」を誓い、「殺人者」らに「七瀬　森を走る」で挑んでいく。

「七瀬　森を走る」で北海道の「隠れ家」に戻った七瀬は、ノリオ、ヘンリーとともに遊びにくる藤子を駅まで迎えにいく。このとき「殺人者」らと対峙することになってしまう。七瀬はヘンリーに恒夫を殺した「殺人者」を殺すように命じる。その時に、以下のように七瀬は考える。

でも、できるだけむごたらしくやって頂戴とつけ加えることを七瀬は忘れなかった。親友二人を射殺された恨みももちろんあったが、事態がここまで来てしまえば、ひるませた方が、あるいは七瀬たち超能力者を皆殺しにするという無茶な考えを彼らに断念させることができるかもしれず、どのみち実力を見せつけておいてもこれ以上悪い立場に陥ることはないと判断したためでもある。

「対決を避けられそうにない」から殺す。しかも、「恨み」と「超能力者を皆殺しにするという無茶な考えを彼らに断念させる」ために、「むごたらしく」殺すよう、七瀬はヘンリーに指示する。このままでは自身らが殺されてしまうので、正当防衛として殺して七瀬が自身の有り様についてふたたび悩むならば、『七瀬ふたたび』は「成長譚」であったかもしれない。

しかしどのような状況であれこれは、西尾を自身が「危険」だからと積極的に殺したことにも通底する。いや、「むごたらしく」殺すということは、死すらも自身らの「危険」回避のために利用するという点で、七瀬のこれまでのどの行為よりも非倫理的である。七瀬にはすでに「正義感」はなく、より残虐性を高めて自己保身のために人を殺す境地に回帰してしまう。そして次には「殺人者」らに負けて、七瀬は死んでしまうのである。

以上を踏まえ、次節では今際の際での七瀬の「祈るよう」な「つぶやき」を検討することで、この作品における七瀬の死の意味について考える。

一抹の希望

ヘンリーもノリオも藤子も殺されてしまい、七瀬は「撃たれてしまった」。その今際の際で七瀬は「自然」に「なぜ超能力者などという突然変異を人類に与えたのですか」と問う。この時に七瀬は、以下のように「祈るようにつぶやき続け」る。

> 突然変異体が迫害されるのは当然だというのね。それじゃ、わたしたちが死んだあとで、もっと多くの超能力者が生まれてくるの。じゃ、その人たちは普通人を自然淘汰するの。ねえ。どうなの。なんとか仲良くやっていくことはできないの。ああ。そんなこと、わたしにとってはどうでもいいことだわ。でも、その時は、お願いだから、その人たちにわたしたちのような苦しみを味わわせないでね。迫害される苦しみを、できるだけ柔らげてあげて頂戴。

基本的に『七瀬ふたたび』の世界では「普通人」よりも「超能力者」のほうが強い。そのために「殺人者」らが「超能力者が多数発生して集団となる前に、皆殺し」にするという考えと同様に、「超能力者」が「多く」なれば「普通人」を「自然淘汰」できるのでは、と七瀬は考えている。そして、それができるような世の中になったとしても、「超能力者」と「普通人」とが「仲良く」なることができないのかということを、七瀬は「自然」に問う。

「仲良く」とは、主体にとって対等あるいはそれ以下の存在と結ぶ関係だ。すなわち、「超能力者が多数発生」した際には、「普通人」が「超能力者」を「迫害」することとは逆に、「超能力者」が「普通人」を「迫害」しないことは可能か、と七瀬はここで問うているのである。

しかし、この問いを七瀬は、自身にとって「どうでもいいこと」と棄却する。その上で今度は、「超能力者」らが「迫害される苦しみ」を「柔らげて」と「祈る」。「超能力者が多数発生」したとしても、「超能力者」側が変わらず「迫害」を受け続ける可能性もある。だから未来世代の「超能力者」には、「迫害される苦しみ」を「味わわせ」ないで欲しいと、七瀬は「祈る」のではなかろうか。

続いて七瀬は、「超能力者」が生まれてくる理由は「人類を試すためだったのでしょうか」と、今度は「神様」に問う。そして、「もし

そうだとしたら神様、人類はまだまだです」と述べて、七瀬の「祈るよう」な「つぶやき」は終わる。この「人類」は、七瀬が「超能力者」を「突然変異」というように、「超能力者」と「普通人」の双方を意味する。そして、「人類はまだまだ」であるというのは、「普通人」の社会で生きてきた七瀬の答えだ。

これまで見てきたように七瀬は、「意識を読みとる」ことで、「普通人」の社会のルールを壊し、「人間の尊厳」も奪いかねない。実は恒夫に言われるまでもなく、七瀬も一方的に「意識」を読みとられる経験をする。「殺人者」らは、訓練で自分の「意識」を隠しながら、他者の「意識」を読みとることができる。「ヘニーデ姫」で七瀬は、まだ「殺人者」らのそういった能力や「大使命」に気付いていない状況で、自分とは違うそういった「意識」を読みとれる存在が「悪意に満ちた相手」ならば、「考える」だけで「あまりに苦痛」と述べる。

「意識」を読みとられそれが周知されるということには、この七瀬の言う「苦痛」や先述した恒夫の言う「苦しみ」が伴う。これを回避するには、「精神感応能力」を無効化しなくてはならない。しかしこれも先述したように、たとえ七瀬が「意識」を読まないと言っても恒夫がそれを保証することは出来ないと指摘するように、七瀬が「精神感応能力」を捨てることが出来ない限り実現は困難だ。では、「普通人」側が「精神感応能力者」を「迫害」しないためにはどうすればよいか。〈敵意〉むき出しの「普通人」の社会に移行するか、「人間の尊厳」が守られないことを受容するしかない。これはまともな状態とは到底いえない。こういった双方のそれぞれの理由から、この世界で「普通人」から「精神感応能力者」が「迫害」されない社会を実現するのは困難なのである。それでも七瀬は、「普通人」の社会で精一杯「精神感応能力者」として生きようとしてきた。

「ヘニーデ姫」において七瀬は、ふと「テレパスの発生によって人類とか自然に生じるいい結果とはいったい何だろう」と問いかける。「精神感応能力者」が「自然」に生み出されたのであれば、「自然」が「よい状態」になるための「機構」として、「精神感応能力者」の「役割や使命」があるはずだ、と考えての問いだ。そして、それは「人類を試すため」の中に含まれている。ただ、以上のように相互の理由で「人類」は「よい状態」になれないことを理解しているために七瀬は、「人類はまだまだです」と答えを出すのだと考えられる。

七瀬は以上の「祈」りを終えた後に、死んでしまった親しかった「超能力者」らが自分の名を呼びかける「幻聴」を聞く。そして今度は、「幻覚」を見る。それは、「藤子の時間旅行能力によってすべての超能力者が迫害を受けずにすんだ」「無数に、平行に存在する多

元宇宙のどこかひとつの世界」で「七瀬の友人だった超能力者全員が楽しく集い、歌っていた」風景。これを見て七瀬が「微笑を浮べた時、深い虚無がやってきた」、という一節で『七瀬ふたたび』は締められる。

七瀬の「祈」りは、この世界での実現が難しいからこそ、「多元宇宙」として世界を変えるまでしないと実現しないのだ。こういった「幻聴」「幻覚」は絵空事ともいえるような、痛ましい夢である。そしてこの夢は、七瀬の生き様によって「祈」りがこの世界で実現することの困難性を示しているからこそ、現れたものだ。それはあまりに哀しい物語に残る、一抹の希望でもある。「人類はまだまだ」という無情の境地ではなくそのような希望が現れたからこそ、今ここで死んでいく七瀬は、あまりの「人類」の有り様に絶望せずに「微笑を浮べ」て死ぬことができたのではなかろうか。希望とは、実現された瞬間に消えるものである。だからこそ、この作品の希望は希望として、七瀬の死の残響として残り続けるのだ。

以上から『七瀬ふたたび』では、「超能力者」と「普通人」とが親和的な関係を構築することの困難性を七瀬の生き様自体が示し、その七瀬の生き様の最終地点が作品内論理にとって必然的な死であるからこそ最後に希望が表れる、と本稿では主張する。すなわち七瀬の死は、決して受け入れられることのない社会の中で精一杯生きた者が今際の際でしか見ることの出来ない希望、これを表出させるための装置であるといえよう。

おわりに——そして『エディプスの恋人』へ

七瀬シリーズという視点に戻ると、その希望は『エディプスの恋人』へと紡がれる。

『エディプスの恋人』では、七瀬を生き返らせるばかりか、「普通人」を殺すのではなく完全に世界にいなかったことにしたり、人の感情操作もしたりする神のような「彼女」が出てくる。まさに、七瀬の夢が実現できる存在だ。しかし七瀬は、「彼女」によって「死んだ七瀬の同胞四人」が蘇生されたにも関わらず、それを今一度この世から「抹消」してもらう。「彼女」の力を利用して「死んだ七瀬の同胞四人」がこの世で迫害されることなく仲良く生きていくこともできるにも関わらず、「自分と同じく苦悩」をその者らに与えたくないから、と。

このような『エディプスの恋人』において七瀬が「友人だった超能力者」を「抹消」させる意味を考えるのに、本稿での「祈」りや「幻聴」「幻覚」に対する考察もヒントになるだろう。しかし、その考察は本稿の役割を超えている。これは今後の課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するためにあたり、明治学院大学教養教育センター教授名須川学氏には、主に資料収集などの研究進行について多大なるご助力を頂きました。ここに記して、心よりお礼申し上げます。

※　本稿における『七瀬ふたたび』の引用は「七瀬ふたたび」『筒井康隆全集第17巻――七瀬ふたたび　メタモルフォセス群島』新潮社、七―一四五頁、一九八四年、『エディプスの恋人』の引用は「エディプスの恋人」『筒井康隆全集第19巻――エディプスの恋人　12人の浮かれる男』新潮社、二二九―三五五頁、一九八四年によった。

【注】

（1）『国文学――解釈と鑑賞』第七六巻第九号、ぎょうせい、二〇一一年。

（2）平石　滋「筒井康隆研究について」『国文学――解釈と鑑賞』第七六巻第九号、一七七―一八〇頁、ぎょうせい、二〇一一年。

（3）ちなみに、この雑誌以外にも多数の筒井に関する論考を集めて特集を組んだ雑誌として、『別冊新評』第九巻第二号、新評社、一九七六年（特集名は「筒井康隆の世界」）や『ユリイカ』第二〇巻第五号、青土社、一九八八年（特集名は「筒井康隆の逆襲――超虚構実験小説の展開」）などがある。

（4）藤田直哉「時間錯誤の前衛――筒井康隆と〈前衛〉のパラドックス」『国文学　解釈と鑑賞』第七六巻第九号、三三―四一頁、ぎょうせい、二〇一一年。

（5）藤田直哉『虚構内存在――筒井康隆と〈新しい《生》の次元〉』作品社、二〇一三年。

（6）杉田俊介「筒井康隆論――文学は差別と戦えるか」『すばる』第三九巻第八号、一五四―一六九頁、集英社、二〇一七年。この論考の中で杉田は「超虚構理論」を「きっと筒井は、現実と虚構をめぐるそうした悪循環にうんざりし、それを断ち切ろうとしたのだろう。なぜか。言葉とは、もっと自由なものであるはずだからだ。だからこそ、方法的に、現実からいったん完全に独立して、真に「自立的」な虚構の領域を構築しようとした。これが筒井の言う超虚構理論である」と説明している。そして、藤田の『虚構内存在』の議論を踏まえ杉田は、筒井が「永遠に差別したり差別されたり、攻撃したり攻撃されたりしながら、自分の中の攻撃性（差別性）を、一つ一つ、処理していくこと。そして未知の喜びに変えていく

こと」を描いていると論じている。

（7）例えば杉本未来「筒井康隆『美藝公』――「藝術」の支配構造と「もうひとつの世界」」『言語態』第13号、六一―七八頁、二〇一四年、などもある。この論考では『美藝公』をフィリップ・K・ディック『高い城の男』と対比させつつ考察を展開している。しかしこの論考もまた、『美藝公』を考える際に筒井の「超虚構（理論）」の独自性というのを問題としている。ただ、個別作品の検討があくまで少ないと述べたように、例えば高度経済成長期の〈文学賞〉がどのように小説で描かれているかという視点から個別作品を検討した和泉司「筒井康隆「大いなる助走」論」『近代文学合同研究会論集』第八号、二―一七頁、二〇一一年、といった論考もあることをここで指摘しておく。

（8）筒井康隆『家族八景』新潮社、一九七二年。

（9）筒井康隆『七瀬ふたたび』新潮社、一九七五年。

（10）筒井康隆『エディプスの恋人』新潮社、一九七七年。

（11）王城正行・柘植光彦・永島貴吉・与那覇恵子「虚構への軌跡」『筒井康隆スピーキング――対談・インタビュー集成』出帆新社、一一八―一七八頁、一九九六年。この中で筒井自身が『七瀬ふたたび』で七瀬が死んでいることからアイデンティティがなくなり操られる存在になってしまうことから、『エディプスの恋人』における七瀬は「もうここでは主人公ではなくて、狂言回しとか探偵役といった役割」と述べた。本稿は七瀬の主人公性を論じたものではないので、とりあえずこの筒井の言を尊重して主人公とは書かず「物語の中心人物」と書いた。

（12）内藤　誠「解説――筒井康隆の醒めた狂気」『筒井康隆全集第19巻――12人の浮かれる男　エディプスの恋人』、新潮社、三五五―三七一頁、一九八四年。

（13）佐々木敦『「第二章　黒い笑いの時代――『家族八景』（1972年）から『大いなる助走』（1979年）へ」『筒井康隆入門』星海社、六三―一一〇、二〇一七年。

（14）「非SF的インタビュー／筒井康隆かく語りき――地獄までは遠いし、壊すものはまだたくさんある」『別冊新評』第九巻第二号、新評社、一六四―一七四頁、一九七六年。

（15）聞き手：日下三蔵「筒井康隆自作を語る#1――日本SFの幼年期を語ろう」『SFマガジン』第五八巻第三号、早川書房、一九―二二頁、二〇一七年。この中で筒井は『コメットさん』以外にも、七瀬シリーズの原型があると述べている。筒井は未発表小説に『意識の牙』があり、「原稿を没」にされて「腹

立たしい」からその原稿を淀川に捨てたと言ったことがあるが、最近「書庫」の中からその原稿が出てきて、さらにその後に「またその原稿が行方不明になった」と述べている。その上で「細かいとこまではおぼえていない」と言いつつも、『意識の牙』が「テレパシーもの」であり、「主人公は女性」、「「七瀬」ものの原型」と語っている。

（16）筒井が七瀬の読みとる「意識」を「どろどろしたもの」というような具体的な物言いを避けたことについて考えるには、植草甚一「解説」『家族八景』（新潮文庫版、新潮社、二七四―二八二、一九七五年）がヒントとなろう。ここでは筒井が「心理学」「話題になった人たちの自伝」「超心理学」に関する書籍を読み、七瀬の「テレパシー力」と「同じようなケースを具体的に説明したものはなかったと打ち明けている」と書かれている。これをふまえ植草は、「つまりこれは臨床医学的なテレパシー・ケースでなく筒井独自のテレパシー・ケースなのである」と述べている。すなわち、外部論理からは一言で表せないようなものを七瀬が読みとっていることが『家族八景』では描かれているために、筒井は「どろどろしたもの」と言ったのかもしれない。

（17）ちなみに、ノリオも「精神感応能力者」である。「七瀬　時をのぼる」において船内で一緒になった女の子からノリオは、「（にくたらしい）（掻いてやる）（この子も泣かしてやるわ）といった「意識」を向けられる。こういった「策謀」を読みとるのは、七瀬のアイデンティティではないということを、ここでは指摘しておく。

（18）ただ、例外的に〈敵意〉がまったく描かれない「普通人」として、ヘニーデ姫がいる。「ヘニーデ姫」で七瀬は、「マカオのカジノ」でヘニーデ姫と出会い、その後日本に帰国しても一緒に行動していく。七瀬によって「ヘニーデ姫には、人を羨んだり妬んだり、そういった相手を憎んで意地の悪いことをしてやろうと考えたり、または故意に人を無視したり蔑視したりするといった、女性に多い性格上のいやな歪みがあまりないように見えた」と語られる。七瀬はヘニーデ姫がそういった「意識」の持ち主である理由について、「美貌に恵まれ金にそれほど不自由したことがなかった」とも考えるが、「それだけが理由ではない気がした」とも書かれる。この「意識」の特質以外にも、ヘニーデ姫は『家族八景』から『七瀬ふたたび』までで、唯一七瀬が「友情」を感じる「普通人」である。このようにヘニーデ姫は、きわめて興味深い登場人物ではあるが、その「意識」を中心とした特質をさらに探求する

ことと本稿の問題意識との関連性は低い。この節は、七瀬が読みとる「意識」の一つのパターンを明らかにすることによって、七瀬がそういった思考パターンで営まれる社会一般にとってどういった存在なのか、そして、その社会で七瀬はいかにして生きていくのか、といった考察に繋げるためのものである。そこで、ここでは例外的な「意識」の持ち主としてヘニーデ姫を挙げておくことだけに留める。

（19）ここで想起されるのは、「万人の万人に対する戦い」という言葉で有名なホッブズの一連の議論であろう。そしてこれを参照することで、本稿の主張を補強することが出来る。鉢野正樹「契約思想の生成と展開――ホッブズの『リヴァイアサン』を中心にして――」（『人間社会環境研究』第29号、八一――九九、二〇一五年）では「自然状態で人間が戦争状態に陥らないためには、相互に持っている他者を排し自己を守る自然権を放棄しあえばいいという」と、ホッブズの主張を簡潔にまとめている。この「自然状態」や「自然権」という用語の解釈については多様な研究があるが、人間が市民社会を形成しないことで闘争状態に陥っている状態が「自然状態」、そしてこの状態で人間が有するのが「自然権」、とはいえよう。より噛み砕いていうとホッブズは、人間の「自然状態」が闘争状態だと考えている。そして、その闘争状態で出来ることなどの「自然権」を排除することで、市民社会が成るとも考えている。まさに『七瀬ふたたび』の「普通人」の社会は、これを描いているといえよう。「普通人」は〈敵意〉を隠すことで「自然権」を放棄して「自然状態」になることを避けることで、〈敵意〉むき出しの闘争状態に陥らない社会を形成している。すなわち七瀬は、「精神感応能力者」であるがゆえに、「普通人」らを「自然状態」にしてしまい、社会の機能を停止させてしまう存在なのである。そしてホッブズのこの思想は、現代の人権思想などとも繋がっているものである。『七瀬ふたたび』で描かれる〈敵意〉を隠す「普通人」の社会も、七瀬ら異質な「超能力者」を強く排除するという態度に問題はあろうが、一つの規範的な社会の有り様ともいえるかもしれない。〈敵意〉を持ったことのない人など、現実にもまずいないのだから。